

近代史の栄光と挫折 —中山茂『帝国大学の誕生』—

科学史家中山茂先生(以下、敬称略)の著作は、天文少年の頃から『占星術』『日本の天文学』愛読。本欄でも<パラダイム>概念で一世風靡したトマス・クーン『科学革命の構造』(訳書)を紹介した。メディア研究でもさまざまな科学技術史著作は大変に参考となり、講義でも使わせてもらった。中山には表芸としての科学技術史研究以外に学術史／大学研究がある。(菊地実)

※帝国大学＝東大として記述します

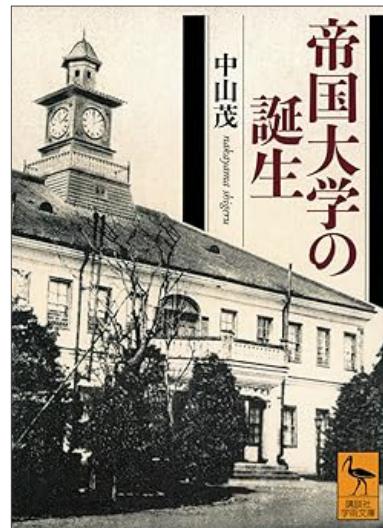
官僚制の定着

一枚の写真がある。初の帝大出身者として昭和四年に桂冠した濱口雄幸^{*1}を囲んで同期帝大出身者の団写真である。側には戦後憲法制定した外相幣原喜重郎が控え高級官僚と学者がずらり並んでいる。明治当初の目まぐるしい制度変更が落ち着き帝大＝東大を中心とした官僚制が完成した記念碑といえよう。

本書は当初中公新書として刊行された。最初読んだ時は気に掛からなかったが、その後立花隆をはじめ多くの東大本や中山の学者経歴を見て、今回改めて論点のある書であると気づかされた。

<図表1>本書の目次

- 第一章 帝国大学の出自——リヴァイアサンの生い立ち
- 第二章 帝国大学のモデル
——ドイツの大学から学ばなかつたこと
- 第三章 官庁エリートの供給源——工科系から法科系へ
- 第四章 出身と出世——上昇気流にのつて
- 第五章 明治アカデミズムの体質——講座制と研究
- 第六章 もしも帝大がなかつたら——批判的展望



<講談社学術文庫>

ハケ岳から唯一無二への道

幕末から明治初期の制度改革は煩雑。その昔「蕃書調所／開成学校／大学南校／東大」と書いたら、「もっとちゃんと調べろ」と叱られた。本書によると「そもそもとは外国語を翻訳するところだったのである」(14頁)。半世紀前の「原文購読」というのは帝大孫弟子ひ孫弟子だった先生方伝統だったと得心した。また古くは軍師・医者を輩出した足利学校も漢文読みが主流だった。

しかし出発時は決して単線でなく、「皇漢学に対す

る洋学派の確執がある」(15頁)。このことに関しては中山の『日本の天文学』(岩波新書)『鍊金術』(紀伊國屋新書)で、明治維新で陰陽道を担当した土御門家が当初天文に携わったものの太陽暦採用であえなくご用済みになった経緯を書いている。中山は東京帝国大学に至る流れを「八ヶ岳」「四ヶ岳」と表現している。それは医学／大学東校、司法省／法学校、工部省／工学寮(後の工部大学校)、内務省／農学校とそれぞれの官庁が巨大予算で学校を運営していたことによる。

東京大学(明治10年/1878年)・帝国大学(明治19年/1887年)で、大学制度はスタートする。面白いのは「東京外国语学校(東京外大)は、<天文方から南校に至る系統の正統を引くのは東京大学ではなく東京外国语学校である>というふうに系図で描かれている」(20頁)。まるでやんごとなき方々や大名系図のようだ。大学は「出世しに来る」という社会通念は初期には薄く、退学者が異常に多く、「出世の峰は八ヶ岳、どれを登るか…迷いがあった」(25頁)。

独をモデルに?

「ドイツアカデミズムの権威主義的体臭が…明治アカデミズムに乗り移っている。という印象批評」(72頁)と従來說を否定。本当にそうだろうか?確かに医

<図表2>明治二十八年法科大学出身者

計	87人
行政官	41人
司法官	19人
その他	27人

学論文や化学・熱力学は当時欧州随一だが、独大学「学問の自由／修学の自由」は分立国家体制ゆえのことではないか。さらにプロシャ哲学や統一後の権威付(官房学)なども理由として挙げられよう。帝国大学は「あえて言えば大学よりもドイツの官僚制度を模すために作られた」(80頁)。

当初文明開化に威力を発揮した工科系官僚時代から明治二十年代は法科系が主力となり、今日までのキャリアと技官の流れを作っていく。

出世のシンボル／高文試験と威力

「学校という登竜門を通じて、縦の社会移動が行われた…シンボル的位置にあったのが帝国大学である」(110頁)、その事例として泉鏡花『婦系図』を挙げる。「帝国大学は士族の巣であった…国立の官学に士族が多く、私立に平民が多いという一般的な傾向は明治期の特徴となっている…一方、平民の上層部(庄屋、村医、酒屋などの地方紹介家)は士族層と異なる価値観を持っていた」(114頁)。

「筆記試験は…中国が本場である」(116頁「科挙」*2)。アンシャン・レジュームを壊すために筆記試験の導入をというのが、十八世紀仏百科全書派の主張で、十九世紀に入り仏を筆頭に西欧各国で筆記試験が導入された。「イギリスではインド植民地官僚試験

<図表3>帝国大学への批判

- (1) 官僚主義的性格に対する批判
- (2) 財政的見地からの批判
- (3) 学問の中央集中と停滞に対する批判
- (4) 学制上の独占的地位に関する批判

(寺崎昌男『帝国大学形成期の大学』(1972年)より)

に筆記競争試験を導入したのが1853年。おかげで官僚の情実はなくなり、質がすっかり良くなつた」(117頁)。

明治二十年(1888年)「文官試験試補及見習規則」と明治二十六年(1894年)「文官任用令」で、明治二十八年(1896年)「高文試験」となる。学生からは「高文試験の予備校と化した法科大学の授業ぶり…圧政詰込主義で…京都帝大＊3の自由探求主義を羨望している」(122頁)。これは現在の憲法学者学説まで尾を引いている。「高文試験の課目としての法学は、それほど実学的ではない…役人は下々のものよりも頭が良いことが何らかの手段で証明されていることが必要である」(124頁)。

「帝国大学＝東大の位置は旧民法の長男の地位にも例えられる…政府の諮問機関、西洋への学術の窓口といった役割は、ほとんど他の大学にひき継がれることはなかった…東京大学は実社会と学問の世界での権威付にものを言わせ…他の学校を圧する絶対的な威力をふるい続ける」(184頁)。

アカデミズムの誤解

「アカデミズムは和製英語」(140頁)とズバリ指摘。元々大学と無関係な仏芸術院や英ロイヤル・ソサエティこそアカデミーだったが、十九世紀後半、専門特化で役割が変質する。「官僚制を作り上げることばかり気を取られていて大学本来の機能である学問の教育・研究…アカデミズムを作る仕事は遅れていた」(150頁)。明治二十六年講座制を成立させたが、教員不足でもあった。また講座制職務俸はかなり落差があるのも興味深い＜図表4＞。一旦成立した講座制は保守的になり「帝国大学は明治国家の中の一小国家になっていく」(160頁)。その事例として「細菌学が講座として独立したのは戦後」(163-4頁)と救いがない保守性を指摘する。また民本主義の吉野作造、天文学の一戸直蔵に見られる官製アカデミズム批判を代表例として挙げている。これは明治第一世代と第二第三世代の世代間闘争的意味合いにも感じられる。

＜図表4＞講座職務俸(明治26年9月)

大学	法科大学	医科大学	工科大学	文科大学	理科大学	農科大学
俸給小計	8,700円	12,850円	8,950円	7,600円	9,750円	6,900円
講座別	民法・商法・ 刑法・ 刑事訴訟法・ 経済学・財政学 <各650円>	解剖学・生理学・ 病理学・薬物学・ 医化学・内科学・ 外科学 <各650円>	土木工学(一)・ 機械工学・ 造船学(一) <各600円>	国語・国史・ 国文学・漢学・ 史学・地理学・ 哲学・心理学 <各650円>	数学・応用数学・ 星学・物理学・ 化学・動物学・ 植物学 <各650円>	
	行政学・統計学・ 国際法 <各500円>		造船学(二) <500円> 火薬額 <400円>	教育学 <500円>	地震学・人数学 <各500円>	農学・農業化学・ 園芸学 <各500円> 地質学・土壤学 <各400円>

(本書154-155頁*を元に作成) ※原資料は寺崎昌男『講座制』の歴史的研究序説

帝大批判の文脈

蘇峰『国民の友』は「帝国大学は伊藤伯の子分養成所」、初代総長渡辺洪基は「伊藤体制の元に秀才を集めためのスカウト」と言い切っている(162頁)。

「帝国大学型の大学づくりには、学問輸入を効率的に行えるという利点と裏腹に、近代化への道のあまりにも早い時期に唯一の完成モデルを設定することによって…高等教育を発展させる可能性の芽を摘むという欠点を内包している」(186-87頁)と結論づけている。これは帝国大学のみならず、士官学校・兵学校、さらに政治・経済・企業組織・技術導入に渡る問題である。

憲法制定・議会開設と帝国大学はセットで、改めて伊藤・井上毅コンビの重要性が窺える。さらに中山は東大に関して「実像の縮小。虚像の拡大」を予言している。昨今やたらと「東大生の云々」が多いのはズバリである。

官吏養成所だった東大も今やコンサルやITや外資優先と言われ、大きく変貌しているのかもしれない。また戦前戦後、高級官僚／政治家／首相を輩出した東大が、宮沢さんを最後に(工学部の鳩ポップは例外)、三十年間宰相を出していないのは世の変化と言えまい。

さて以前ここで取り上げた東京天文台長広瀬秀雄著書で、講座制によって有能技手や観測員が講師でリタイアしていく姿を紹介した。中山は東大を卒業した後平凡社に入り、1955年フルブライト留学生としてハーバードに留学。帰国後も次々に著作を出したが、定年まで東大講師で定年時に助教授となった。超一流の英米留学も含め素晴らしい実績にもかかわらず、何故か。自伝では実名を挙げているが、中山の同僚に伺ったところによると、「舌鋒鋭い」「どちらか」というジャーナリストイックな分析文章、「物言」によるところが大きいのではないかと思われる。それは『日本の天文学』にもよく表れている。古巣をズバズバ批判する、私はそこが好きなのだが……。

■著者/ 中山茂(なかやま しげる)。1928-2014年。兵庫県尼崎生まれ。旧制北野中学、広島高校、1951年東京大学理学部天文学科卒、平凡社入社。ハーバード大学大学院留学。在学中にケンブリッジ大学留学。1960科学史でPhD。東大講師・助教授を経て、神奈川大学名誉教授。『パラダイムと科学革命の歴史』『近世日本の科学思想』『天の科学史』『西洋占星術史』『科学技術の戦後史』など、訳書にトマス・クーン『科学革命の構造』など、著書多数。

■書誌/ 2024年3月14日講談社刊行、A6版、224頁。

本書の原本『帝国大学の誕生——国際比較の中での東大』(中公新書1978年刊行)。この第三版(1981年)をもとに2024年講談社学術文庫として刊行された。